

---

# 東方日常記-The World Where Love Spreads-

龍ちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方日常記 -The World Where Love Spreads-

### 【ZPDF】

Z0024Z

### 【作者名】

龍ちゃん

### 【あらすじ】

幻想郷に住まう恋する少女達、その日常を描く物語。彼女達の面白おかしい日常を覗いてみませんか？

page1：「嫉妬の縁眼」（前書き）

・水橋パルスイ

嫉妬の妖怪。

同じく地底に住む星熊勇儀に好意を寄せているが、自分ではそれを認めようとしない。

今回の主人公。

・博麗靈夢

貧乏神社の巫女さん。

その掴みどころのない（適当な）性格が妖怪に人気。

敵意も好意もするすると受け流す彼女は、きっと斬鉄剣でも斬れな  
い。

…ああ、妬ましい。

朝起きてみたらなんだか地底のみんなが忙しなく動き回つていて、なんとなく居づらかつたから久しぶりに地上に出てきたつてこののに。

特に行くところもないし、雪も降つてるし。

だからって、人間の里なんかに立ち寄つたのが悪かったのか。

里は、色とりどりの煌びやかな装飾と、浮ついた人間共とで埋め尽くされていた。

派手な装飾のせいか、雪の白さが際立つて目を細める。

妙な被り物をかぶつた子供が、そいつ中を走り回つててうるさい。

…よもや地上までの騒ぎとひとま。

「失敗したわね…これなら、多少屈づらしても地底にいたほうが良かったかも…寒いしつるさっこ」

思わず、ぶるっと身體こをかる。

こんなに寒いところのこ、人間共には活気が満ち溢れている。

「…ちつ、妬ましい…ああダメだわ、どこか人気の無ことじりで雪を避けましょ」

そう呟いて私は一人、そそくせとじの喧騒から遠ざかつていった。

「…んでも、その流れでどひしてこに来るわけ?」

「じいじなら屋根もあるし、人気もないじゃない」

「なめてんのアンタ?…まあ人は来ないけど…」

この神社の巫女である靈夢は、不機嫌そつそつと言つた。

「はあ、まあいいわ…それにしたつて珍しいわね。パルスイ…よね?アンタの顔を見るのなんてあの異変の時以来だわ」

ちょいちょい、と手招きしながら靈夢が言つ。

「わうよ、私はパルスイ。地上に出る」と自体久しぶりだしね…前に出たのはどのくらい前だつたかしら…」

「ああ、いいわ。アンタらの感覚で過去の話をされるといついて行けない」

靈夢はふう、と呆れたように肩を竦める。

「なによ、失礼ね…そこまで昔の話じゃないわ」ちゅこちゅい、と手招きしながら靈夢が言ひ。

「そうよ、私はパルスイ。地上に出る」と自体久しぶりだしね…前に出たのはどのくらい前だつたかしら…」

「ああ、いいわ。アンタらの感覚で過去の話をやれるひとつで行けない」

靈夢はふう、と呆れたように肩を竦めて、縁側に座る。  
私も座れって事なんだろうか。どちらかと言えば室内に入りたいんだが。

とりあえず私も縁側に腰掛ける。

「まつたく、失礼ね…そこまで昔の話じゃないわ…一ヶ月くらい前にも出てきたのよ」

「あら、 そつなの？ その時も一人で？」

なんだか眠そうな目で空を見ながら、靈夢が問ひ。

「いえ… その時は…」

言いかけて、口をつむぐ。

そうだ、あの時あんな事があつたから、今日も一人なんじゃないか。

「…ええと…」

「ああ、言いたくないなら別にいいわ。なんとなく気になつただけだから…お茶、飲むわよね？こっちの部屋に上がりつて」

と言つと、靈夢はひらひらと左手を振つて立ち上がつた。

言われるままに、密間と思しき部屋に入る。

暖かい。

「じゃ、私はお茶を淹れてくるから…その辺に適当に座つてなさい」

縁側にいる靈夢が、なんとなく事務的に言つ。

「え、ええ…ありがと」

と応えると、障子が閉められた。

(…相変わらず、掴みどころがないと言つが…)

今まで、彼女との会話はそう多くなかつた。

ここを知つていたのも、友人に連れられて來たから。その時は確か宴会だつた。

人間の主催する宴会なのに、なぜか妖怪が…それも屈指の実力者が多かつたな。

そして彼女はやはり、そんな妖怪達にも、いや、誰に対しても変わらず…どことなく飄々とした態度だつたのを覚えている。

他人の事情や心情に入り込みすぎず、適度な位置から傍観し、時には助言する。

基本的に妖怪なんて自分の事しか考えてない。

だから、好んで他人と関わるような奴もあまりいない。

だけどそんな妖怪達も、彼女の達觀したような…飄々とした人柄が

心地良くて、彼女の周りに集まるのかも知れない。

「んん、なんだか妬ましい。」

「お茶淹れたわよー。あ、これ羊羹…食べるわよね？」

そんな事を考へていると、不意に障子が開いて靈夢が入つて來た。

「えつ？あ、ああ…ありがと。食べるわ」

「そう、良かつた。これね、近くの人里にある美味しい和菓子屋さんの羊羹なのよ」

心なしか嬉しそうに、羊羹に爪楊枝を刺す靈夢。

「へえ…なんだか悪いわね、いきなり押し掛けてきたのにそんな良い物を…」

私も、その羊羹に爪楊枝を刺す。

「いいのよ別に、気にしないで。…それにこれは、貴い物だしね」

靈夢はそう言つて、羊羹を口に運んだ。

「んーー。」

靈夢の顔がふにゅっと綻ぶ。

それは、初めて見る表情だった。

(…驚いた。こんな顔もするのねこの子)

そんな珍しいものを眺めつつ、私も羊羹を少しかじる。

「…あ、美味しい」

「でしょ~う~うふふ」

幸せそうな靈夢。

その笑顔が少し妬ましい。

(幸せそうね…参拝客はいなさそうなのに…)

「あ、ねえパルスイ」

不意に、靈夢が私を呼んだ。

「なに?」

「今日は12月24日じゃない? 地底でも、クリスマスって祝うの?

「…………あつ」

そうか。そういう事だったのか。

地底のみんなが忙しなかつたのも、人里の人間共が浮ついていたのも… そうか、クリスマスのせいだったのね。

「ん? どうしたの?」

靈夢が不思議そうな顔で覗き込んでくる。

「あつ、いや…ええ、祝つわよ  
「

今まで、クリスマスの事 자체を忘れていたなんてとてもじやないが言えない。

「ふーん?…なるほどねえ」

靈夢はなんだか怪訝そうな顔をした後、お茶を啜った。

「ええ、まあそうね」

私もつられてお茶を啜る。

「…ヒトヒトヒタント、あの鬼と喧嘩でもしたのね」

(ーー?)

思わずお茶を吹き出しそうになる。

この巫女は何を言こ出したのか。

「なつ…何を…」

「んー?だって、クリスマスには恋人と愛を誓むものよ

「ヤーヤとこやらしい笑みを浮かべながら靈夢が言つ。

「あああ、アイツは恋人なんかじゃないわよーばつ…バカじゃないのー?」

「あ、そうなの？でもいつも一緒にね」

く……なんでそんな事を聞いてくるのか……

和の田舎の間まで遙か細い刀刃になら

「…まあ、何かあつたんなら話して」「覧なれどよ。」  
なにげに、愚痴くらいなら聞くわよ

や、今までいやな笑みを浮かべてましたと思つたら、急にまたいゝもの調子に戻つて靈夢が言つた。

知っている気がする…。

心の中を覗透かれてこぬよつた、そんな感覚を多少の外にも覺

「…ひと度前に、いつか出でたつて言つたでしょ？その時にな  
んだけど…」

そして、どうしてか自然と話してしまつ私がいる。

おかしいな、普段は絶対他人に愚痴なんて吐かないのに…。

「うん」

靈夢は頬杖をついて、聞いてるんだか聞いてないんだか分からぬ  
ような目でこちらを見ている。

「あの、ほり、儀式って、なんとかか、その、も、モトの、じやない？」

「ううう事を人に言うのがなんとなく恥ずかしくて、思わず言葉が  
つかえつかえになってしまった。

「やうね。アイツは男らしい頼りになる女だしね」

靈夢がすす、とお茶を啜る。

「それで…ひと月前にこっちに来たとき…ああ、山の方に行つたん  
だけど…そこで、妖怪の女の子達に囮まれて『デレデレ』して勇儀を  
見て…その…」

「嫉妬して啖呵を切つてそのまま逃げてきて、未だに仲直りが出来  
ない？」

「…………」

その通りだ、当たつている。

あまりに的確なので、沈黙しか返せない。

「……うーん、別にいいんじゃない？」

そつ言つて、また羊羹を一口かじつて幸せそつな顔をする靈夢。

「…え？」

「だつてアンタ、嫉妬の妖怪でしょ？嫉妬すんのが仕事みたいなも  
んじゃない。アイツ…勇儀だって、そこまで気にしちゃいないわよ

ふう、と息をつくと、靈夢はこちらに微笑みを向けた。

「自分が嫉妬の妖怪だつて忘れるべりに嫉妬したの?」

靈夢はやうやく、うふふ、と笑つ。

「ぐ…別にそりこりわけじやあ…」

「ん、ならお帰りなさいな。せつかくのクリスマスなんだから、私なんかじゃなくて…もひとつ一緒にいたい誰かさんがいるでしょ?」

少し困ったように笑い、靈夢が立ち上がる。

「…」めんなさいね、靈夢」

私も立ち上がる。

帰ろつ。帰つて、勇儀に謝りなきや。

「別に構やしないわよ。私も、話し相手が欲しかつたとこだつたしね…まあ、また何かあつたらこいつでも来なさいな」

「ん、ありがと、また来るわ。」

私は靈夢にお礼を言つて、日差しが反射して眩しい雪道の中を帰つて行つた。

「…あの子、面白い子だつたわねえ。嫉妬の妖怪が自分の嫉妬に耐えられないなんて」

「だからって、私があげた羊羹まで出しちゃつてまあ…私も嫉妬し

「さひ さひ

「うわよ紫……アンタがなんで嫉妬すんのよ」

「…………はあ……自分の事には疎いといつか、無関心といつか……」

「あー?なんか言つた?」

「いじえー、なんでもないわあ……それより、どうせ今日もボーッと  
してるだけなんでしょう?なら、私と出掛けましょ!」

「珍しいわね、アンタがこの時期にちやんと起きてるのだつて珍し  
いのに…出掛けるつてどーに?」

「そうねえ、人里に私が行くと色々面倒だし…他この辺りで洋風  
の置物を普通にやつていそうな所ね」

「あー…なるほどね。仕方ない、支度をするからひとつ待つてな  
れこ」

「はあー

おまけー：「嫉妬の縁眼」（後書き）

いつも、龍ちやんです、（ノ）ノ

今作は私の一つ目の連載になります。

もう一方、「ダンス・イン・バレットレイン」も連載中なので良かつたら（ノ）

今作は東方Projectの一次創作となります。

ほとんど作者の趣味成分しか入っておりませんが、楽しんでいただければ幸いです。

ではまた、（ノ）ノ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0024z/>

---

東方日常記-The World Where Love Spreads-

2011年11月30日12時57分発行